

オホーツクの向こう側

八木 宏 樹

はじめに

小樽に住んでいて休日に第三埠頭あたりを散歩するとたいていロシア船と出会うことになる。大部分は漁船で、中古車をあふれんばかりに積んで昨今のロシアにおける日本の中古車ブームを目の当たりにすることができる。立ち並ぶ倉庫の屋根の向こうに船舶旗がみえればそれはサハリンからの5,000トン級のフェリーボート、遠くはウクライナあたりの客も乗せ、コルサコフを

經由して大挙しての買い出しツアーにやってくる。観光バスで水産試験場のある余市まで遠出して、スーパーマーケットで山ほど日用品を買いあさるロシア人を見ることも珍しくない。昨年、小樽市を訪れたロシア人は2万人、うち観光客も3,000人以上になるという。サハリンと北海道、いつのまにかオホーツク海を人々が自由に行き来できるようになった。私たちがサハリンに渡り、いろいろなものを見聞きできるのも、

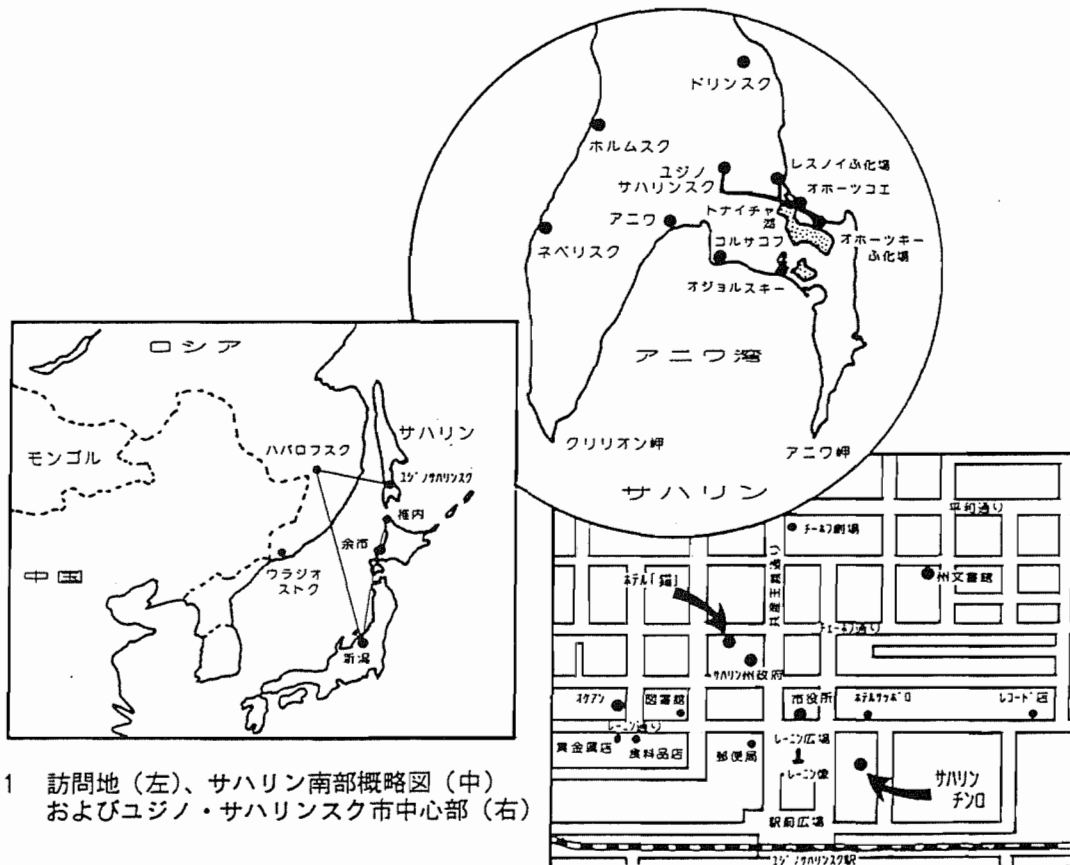


図1 訪問地(左)、サハリン南部概略図(中) およびユジノ・サハリンスク市中心部(右)

まさしく時代だからなのだろう。

サハリンへ

宗谷岬からわずか50km程しか離れていない私たちの交流相手は、ここ数年でまさしく激動の時代を経てソビエト連邦からロシア共和国となった。久しく訪れることもままならなかったサハリンで、今回、私たちは多くの人たちと触れ合うことになった。平成2年から始まったサハリン太平洋漁業海洋研究所(サハリンチンロ)との研究交流で、長い間のすきまを埋め始めてもう4年目となった。

今回の訪問は4月1日から10日までで、例年どおり新潟およびハバロフスクを経由してユジノ・サハリンスクに入った。訪問者は稚内水試の宇藤均漁業資源部長、同じく丸山秀佳沖合科長、それに私の3名であった。

霧のためハバロフスク空港に2時間以上足止めされ、やっと着いたユジノ・サハリンスクは、曇空とはいえ穏やかであった。今年は雪が多い、しかし、サハリンでは5月半ばの積雪も珍しくない。「サハリンはまだ冬ですよ。今度からもう少し気候のよい時期に来られたらいいですよ」と出迎えのサハリンチンロ・ズベリコワ副所長が言っていた。サハリンへの第1歩、私たちはいきなり冬のさなかに逆戻りした。

雪のトナイチャ湖

ユジノ・サハリンスクへ着くのが金曜日の午後ということもあって、サハリンチンロの職員たちと週末のエクスカージョンから始まるのが昨年からの慣例となった。今年にはトナイチャ湖のほとりのオホーツコエ村と、その付近に位置するオホーツキーふ化場およびレスノイふ化場を訪ねることになった。この先ずっと私たちの世話をしてくれるボロディン氏やズベリコワ氏はもちろん、若い研究者シュペーレーバ氏もやってきた。サハリンチンロの甲殻類研究の責任者であるプシニコフ氏は、奥さんのニシン研究者プシニコワ氏とかわいい娘オルガを連れてあとから別の車でついてきた。

2時間ばかりしゃべったり眠ったりしていただろうか。私たちを乗せたサハリンチンロの荷物運搬車兼送迎車はユジノとコルサコフを結ぶ国道から東に折れ、車2台がやっとすれ違つかどうかの細い山道に入っていた。「雪がなければもっと広いのですがね。」そう言われても人里離れた山の中、雪がなくてもむき出しの道路に雑木林の連続であることは想像に難くない。

トナイチャ湖は一面の雪だった。湖沼性ニシンの産卵場として、また、夏には緑美しい避暑地、釣りのメッカとしてまことに興味あるトナイチャ湖も、息で曇った車窓からは湖面と陸の区別がつかない雪景色が見えるだけであった。湖とオホーツク海を結ぶオーチェプカ川も渡ったが、言われな

ければおそらく気がつかなかったであろう。

#### レスノイふ化場にて

4月だというのにひざ上まで雪に埋もれながらレスノイのふ化場まで歩いた。山中の、木の家というよりも小屋という方がふさわしい事務所で、クニャジェワ場長がロシアの婦人特有の大きな体をゆすりながら私たちを出迎えてくれた。プシニコワ氏の学生時代の同級生で、30年来の友人だと紹介され、それではと、インスタントカメラで二人そろっての写真を撮り、それぞれにプレゼントすれば、ただ照れて笑うだけの二人であった。

大人数での食事、丸山科長がソファに腰掛けようとする、クニャジェワ氏が「そこは先日エリツィンが座った場所」、宇藤部長には「そこはフィヨードロフ知事が座った場所だ」と誇らしげに話しかける。ごく普通の薄汚れたソファである。山奥にあり、職員20名の本当に小さなふ化場ではあるが、優秀な成績をあげている模範企業というこ



写真1 レスノイふ化場にて。

とでサハリン州政府が大統領を案内するまでになった。その栄光のふ化場も今年中には民営化される。カラフトマスだけでなくサケにも力を入れて仕事を広げたいとのことであった。

食事のコニャック（なぜかサハリンでは食事の途中に休憩が入り、この間にコニャックを飲んだり煙草を吸ったりする）を傾けながらクニャジェワ氏は昔の写真を私たちにを見せてくれた。何もないところから開墾を始めた時の写真、洪水ですべてを失った時の写真、写真に写った若い笑顔と目の前の本人を見比べれば、いやが応でも時代の年輪を感じる。それにしてもサハリンのふ化場建設から始まる長い歴史、北海道のほんのわずか北の土地での出来事を、私たちはなぜ、これまで知るすべがなかったのだろうか。

#### 研究交流本番

週が明けていよいよ研究交流は本番となった。夏時間を採用しているサハリンでは日本よりも3時間ほど早く朝が来るので、えらく早起きしたつもりでも時刻は8時近い。夜中のうちに積もった雪を踏みしめながら、まだ薄暗い「共産主義通り」を一般の通勤者に混じって歩き、レーニン像の前を過ぎて駅に迎えばすぐサハリンチンロ本部である。とは言ってもビルの1階はレストラン

と銀行だし、いわゆる雑居ビル。昨年来新しい施設を建築中で、もう図書の一部は引越し済みだというから、駅前のサハチンロでの交流もこれが最後になるだろう。

研究交流は2階のルフロフ所長の部屋で行われた。所長室は簡単な会議も開けるようにテーブルがセットされていて、少々寒いのを除けば広々としていて居心地がよい。私たちは、昨年もそうであるが、研究交流の間はほとんど外出もせず所長室に居座る。研究発表、事務的な協議事項、ティータイムと、長時間にわたる交流には体力が欠かせない。

座長は研究交流中、ずっとズベリコワ氏が担当し、ルフロフ所長はたまに顔を見せる程度であった。私たちがずっと所長室を占領して所長は姿を見せない、いったいルフロフ所長はどこにいたのだろう、不思議に思って後で尋ねたら、「ズベリコワさんの部屋にいたんだよ」との返事、分かってしまえばごく当然のことである。

今回の研究交流の場には若手研究者が自由



写真2 研究交流。交流は自由な雰囲気で行われた。

に入ることができた。海洋学のカンタコフ氏がいる、タラの研究者のキム氏がいる、シュキナさんがいる、なつかしい顔がそろった。ボロディン氏はまたカジカの話で加わってくるのかな？新しい顔も多い。動物プランクトンのサマトフ氏には休憩の間にも日本のプランクトン研究の現状についてずいぶん聞かれた。カンタコフ氏と私は専門が同じであることから海洋観測機器類の話で盛り上がり、今後個人レベルでも研究協力をすることを約束した。人を知ることが研究の財産であるとすれば、私は大きな成果を得たことになる。

#### 研究者の不思議な出会い

プシニコワ氏はニシンの研究者である。昨年長女をウラジオストクへ嫁に出したといっても、トンボ眼鏡の奥に輝く瞳には少女の面影が残る。かたや丸山科長もニシンの研究者である。専門が同じからか、この二人はよく似ている。同じテーマを持っていると研究者同士で研究手法や考え方が似てくることはよくあるが、ニシンに対する思い入れやニシンの年齢査定についてのこだわりなど共通することが多い。

二人に共通する興味のひとつにニシンはどこで産卵するかという問題がある。サハリンでも最近は大規模な産卵が見られなくなった。とは言っても資源としてのニシンがまだ存在している

のでどこかで産卵は行われているはずである。プシニコワ氏は北海道の沿岸が産卵域だと主張する。それに対して私たちはいくら調査してもそのような事実はなかったと反論する。そんなやりとりの中、プシニコワ氏と丸山科長はさすがに専門家で、いろいろな観点から攻めぎあい、また防御する。鱗からの年齢の読み方が問題になれば、相手の手法を確認すべく、万能投影機まで持ち出して実際のサンプルで試すほどであった。「丸山さん、プシニコワさん、もう8時ですよ、夕食にしませんか」そう言わなければ朝まで議論を続けそうな二人であった。

私がこの二人が今回初対面であるを知ったのは翌日のことだった。交流以前にも二人は互いの研究内容をよく知っていたし、なによりも相手の成果を評価していた。北海道とサハリン、目と鼻の先に位置しながら今までこの二人が出会わなかったことの方がおかしい。まるで離ればなれになっていた親友が長い時を超えて再会したように話し込む二人、「丸山さん、サハリンの海岸にニシンの調査に来ませんか?」「ぜひ連れてってください」、国境を超えて行き来していたニシンの群れに遅ればせながら、研究者同士の意識も国境も取り払われる時が到来した(著者注:この二人は何語で会話したのだろう、などという疑問はほんの些細な問題でしかない)。

帰れない!?

交流のあいだ、所長室からユジノ・サハリンスク駅が見わたせた。駅前のバス停に積もる雪がだんだん多くなっているような気がしていた。

ボロディン氏が約束時刻に1時間も遅れてホテルに来たのはユジノ・サハリンスクを立つ朝のことだった。吹雪でバスが動かない、外に出てみると、降りしきる雪の中、道路は通勤者で歩行者天国と化していた。ボロディン氏の帽子もコートも雪で真っ白、1時間以上も歩いて私たちを迎えに来てくれたという。

サハリンチンロにお別れの挨拶に行く予定が、一転して飛行機の待機となった。「今日は飛行機、無理ですね」、そう簡単に言われても私たちは翌日の新潟行きに接続しなければ日本に帰れない。空港の情報は空港でなければ得られないため、急きょボロディン氏が空港に詰めることになった。ズベリコワ氏は万一の場合を考えてコルサコフからの船便を確認してくれた。私たち



写真3 4月8日、吹雪で市内の交通はマヒした。

は試験場や家族への連絡、ハバロフスク以降のホテルや飛行機のキャンセルなどの準備のために電話番号のリストアップを始めた。電話事情の悪いサハリンだけに、たった一度の国際電話で日本国内の15か所の相手にすべて異なる用件を伝えてもらわなくてはならない。翌日臨時便でハバロフスクに向かい、まにあえばそのまま新潟行きに乗り換えるという離れ技が残っているので、準備万端整えた上、連絡は直前まで控えることにした。

「どうでしょう。市内でも見学して来ますか？」さすがはロシア人、悠々としたものである。私たちが天候のことはどうすることもできないのでズベリコワ氏の勧めに従い、昼食後は町に繰り出すことにした。

午後、市内はバスも動き始めており、薄日も射して積もった雪は少しずつ解け始めていた。研究交流が無事終わった解放感なのか、久しぶりの晴れ間のせいなのか、肌に当たる冷たい空気が心地よく感じた。水たまりをよけきれずに靴を水浸しにしながらも、今回の交流で初めて街の雑踏を経験することになった。そういえば、北海道に向けて土産のひとつも買っていないことに気付いた。

おわりに

1年間で2,000%とも2,600%ともいわれたインフレの中で、サハリンの人々はたくましく生きていた。物価はハバ

ロフスクよりもモスクワよりも高い。しかし、視点を変えればそれはサハリンの豊かさを示している。昨年より街中の兵隊の数が減った。昨年より人の顔が明るい、市場でのビールやチューインガムはもはや貴重品ではない。ソニー・ショップにはレーザーディスクやコンパクトディスクも売っている。子供向けにはポップコーン売り場もある。サハリンの何かが変わりつつある。来年、函館からの直行便が飛ぶようになれば、ますますサハリンは近くなる。オホーツクの向こう側でひとつの国が生まれ変わろうとしていた。

(やぎ ひろき 中央水試 海洋部  
報文番号 B2032)



写真4 プシニコフ氏は家族で空港まで見送りに来てくれた。